

1.5

インタープリテーションの歴史

※写真を更新して追加する予定

コンピテンシー表対応
K2-1

インタープリテーションのはじまり

インタープリテーションの起源は、民間の山岳ガイドにあると考えられています。1872年、アメリカに世界最初の国立公園であるイエローストーン国立公園が誕生しました。当初の国立公園の管理は軍隊が担当しており教育的なサービスはありませんでした。しかし、来訪者が訪れるようになり、自然発生的に展示やガイドなどが行われるようになります。当時、アメリカやヨーロッパの山岳地域ではすでに民間のナチュラリストによるガイド活動が行われていました。ヨセミテ国立公園の誕生に大きく貢献したジョン・ミュアや、ロッキー山脈で活動していたイーノス・ミルズなどがよく知られています。1900年代にはいると、そのような民間のナチュラリストによるガイドプログラムを取り込む形で、アメリカの国立公園が公的なサービスとしてインタープリテーションプログラムを導入し、公園当局による正式のインタープリテーションが始まります。1916年に国立公園局（National Park Service）が創られると、初代局長であったスティーヴン T. マザーはインタープリテーションの普及を押し進め、急速に普及させ、1925年には、国立公園局内に造園部門とエンジニア部門に並びたつ3つ目の部門として教育部門が組織されました。インタープリターのトレーニングもこの頃始まっています。

アメリカに誕生した国立公園の制度は急速に世界に拡大し現在では世界の約140カ国に広がり、インタープリテーションの考えも普及しています。

ビジターセンターのコンセプト

1950年代に起きた大きな動きに、インタープリテーションの中心として「ビジターセンター」が整備されたことがあります。アメリカの国立公園では1956年から1966年にかけて「ミッション66」と呼ばれる国立公園整備のビッグプロジェクトが行われ、その中でたくさんのビジターセンターが整備されました。ミッション66以前、ビジターセンターは、グランドキャニオン国立公園などの他3つしかありませんでした（「公園博物館」という展示施設はあった）が、旧博物館を改装したものも含めて、1975年には281のビジターセンターができていました。日本でも1964年を最初にビジターセンターが整備され、その後も環境省や都道府県によって多くのビジターセンターがつくられています。例えば東京都では、現在までに秩父多摩甲斐国立公園内や小笠原国立公園に七つのビジターセンターが作られています。しかし、日本の初期のビジターセンターは、解説のための職員（インタープリター）の常駐は行われず、展示が情報提供の中心でした（博物展示施設と位置づけられていた）。日本のビジターセンターでインタープリターが活動するのは1981年以降のことになります。

インタープリテーションの展開

アメリカ国立公園の初期のインタープリテーションは、自然資源に関する解説や、利用指導（安全や環境保全上の指導）の役割が中心だったと思われます。しかしインタープリテーションが扱う範囲は、自然から歴史や文化、建築やアートなど、様々な分野にひろがりました。1960年代中頃から現在にかけて、特に重要な新たな役割を担うようになります。それが「環境教育」です。環境問題が急速に世界共通の課題として注目される中で、国立公園等におけるインタープリテーションが環境教育の重要な機会と考えられるようになったのです。

日本にインタープリテーションの考えがもたらされた1980年代はこの流れの中にあり、日本ではインタープリテーションは環境教育の手法として理解されることが一般的でした。

2015年に国連サミットで示された持続可能な開発目標（SDGs）などの影響もあり、インタープリテーションは「持続可能な社会」を実現させるための機会、あるいは方法として認識されるようになっていきます。社会状況の変化の中でインタープリテーションの目的や役割は常に変化しています。

インタープリテーション全体計画の普及

2000年代以降の重要な要素として、「インタープリテーション全体計画」の普及があります。アメリカの国立公園では、1990年代後半から、様々なインタープリテーションのメディアを包括的に関連させてプランニングすることの重要性が言われ始め、1999年にはすべての公園で共通の指針に基づいたインタープリテーションの全体計画を立案することが求められるようになりました。インタープリテーション全体計画の手法はミュージアムや世界遺産など様々な分野に普及しています。

注釈：

ジョン・ミュアが書いた文章の中に、より深く自然を理解し、より自然に近づいていくことについて「インタープリット」（解釈する・翻訳する）という言葉が使われていて、これがインタープリテーションという概念の始まりだと考える人もいます。

注釈：

日本の自然公園関係の文章で「インタープリター」が最初に登場するのは、現在把握しているものの中では、1951年に東良三氏が『国立公園』に寄稿したイーノス・ミルズについての文献が最も古い。東は「インタープリター」に「自然代弁者」の訳を当てている。イーノス・ミルズはロッキー山脈で活動したナチュラルリストで、インタープリターの祖の一人として、海外の資料にもよく登場する。

（古瀬浩史）

注釈：

環境省（当時環境庁）の資料では、1989年に自然環境保全審議会自然公園部会の中に設置された「利用のあり方小委員会」の報告書の中にインタープリテーションに関するまとまった記載がある。また、1992年に設置された「インタープリテーション検討会」では、インタープリテーションに対して当初